

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：10106

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770103

研究課題名(和文) 1620年代から50年代を中心としたイングランドのイエス生誕詩の政治的多様性

研究課題名(英文) Politics and Varieties of Yuletide Poetry in England from 1620s to 1650s

研究代表者

笹川 渉 (Sasakawa, Wataru)

北見工業大学・工学部・准教授

研究者番号：10552317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1620年代から王政復古の間に見られるイエス生誕を描いた詩作品が、チャールズ二世の生誕を言祝い、王権を支えるという政治的言説を多分に帯びていたことを論じた。マイナーな詩人も含む王党派の作家たちは、1630年のチャールズ二世の生誕をイングランドへの救世主の到来と位置づけたが、その文学的表象は内乱期と共和制下、王政復古に至るまで続いていた。また、キリストに重ねられた国王はクリスマスを含む民衆の祝祭の守護者として描かれることで、国王の存在を国民に正当化するための手段とされていたことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This research explains the significance of Yuletide poetry in early modern England and how it was imbued with political implications, eulogizing the House of Stuart, especially the birth of Charles II, and functioning as a theme to support the kingship through the period. Cavalier poets, including minor ones, identified the birth of Charles II with the coming of Christ. This continued throughout the Civil War, the Interregnum, and even the Restoration. The study also suggests Cavalier poets described Christ, identified with King Charles I, as a defender of popular festivals including Christmas in order to vindicate the kingship.

研究分野：初期近代イギリス文学

キーワード：イギリス詩 スチュアート朝 ジョン・ミルトン クリスマス

1. 研究開始当初の背景

十七世紀初頭において、イエスの生誕を祝うクリスマス詩は王権の讃美と強固に結びついたジャンルであった。このことは、1630年にチャールズ一世の嫡子が生誕した際に、キリスト生誕を祝うクリスマス詩に重ねて、スチュアート朝の嫡子誕生を称讃し、新王が平和な治世がもたらすことを歌い上げた作品群が、Ben Jonson, Robert Herrick, Richard Fanshwe 等の王党派詩人の作品に見られることに表現されている。

このような歴史的、文学的背景があるにもかかわらず、十七世紀を代表するピューリタン詩人 John Milton のクリスマス詩「キリスト生誕の朝に寄せて」は、1620年代にカトリックに傾倒しつつあった王権を批判した作品と解釈する批評動向のもとで論じられることが多かった。例えば、1970年代後半以降、政治批評の隆盛とともに、Christopher Hill, *Milton and the English Revolution* (1977), Michael Wilding, *Dragon's Teeth* (1987), Barbara K. Lewalski, *The Life of John Milton* (2003) 等により Milton の急進性の萌芽を本作品に読み取る動向が主張されてきた。

しかし、スチュアート朝の時代に、クリスマス詩を書くという行為が王権と深く結びついていたことを考慮すれば、Milton の作品を王党派によるクリスマス作品群の中に布置することで、Milton の急進的な性格ではなく、彼の親王党派的特徴を見いだすことが可能である。このような批評は近年になって、Ann Baynes Coiro, “A ball of strife” (1999), James Fleming, “Compos’d 1629” (2005), Gordon Campbell and Thomas Corns, *John Milton* (2008) 等の批評で議論されている。しかし、国内の研究動向において初期近代のイエス生誕詩を見ると、Milton の王党派的特徴や、スチュアート朝におけるクリスマス詩の特質と政治性を論じているものは少ない。

2. 研究の目的

本研究では、十七世紀以前のイエス生誕詩の系譜をたどり、そのテーマが純粹な信仰心からのみ生まれるものではなく、政治的言説の影響下のもとに語られてきた背景を提示する。論点の中心として、イギリス文学ではその典型的な例が十七世紀前半から中葉にかけて散見されることを明らかにする。上記の点を明らかにするために、本研究では次の(2)を中心として以下の2点を論じる。

(1) 十七世紀以前のイエス生誕詩の政治性
中英語の時代については *The Early English Carols*, 2nd ed. (Clarendon, 1977) 等のアンソロジーを参照しながら初期近代以前のクリスマス詩についての概略をまとめる。いわゆる “Lullaby Carlos” などの聖母子を主人公とした母から子への子守唄や叙情詩の形式が中心であるが、イエスとマリアという登場人

物を設定しているにもかかわらず、母一般の声を代弁する、あるいは修道会の主張を述べる等、多様な利用をされてきたことがうかがえる。中英語のイエス生誕詩が既に杵物語としての機能が重視されていたことを確認し、スチュアート朝称讃詩の先駆となる語りが準備されていたことにつなげる。

(2) スチュアート朝讃美のためのクリスマス詩の政治性とその変遷

杵物語として機能するイエス生誕詩は、十七世紀初頭において宗教性色彩に政治性を帯びたダイナミックなジャンルであることを論じる。王党派の主張はスチュアート朝讃美や王権神授説の強固等の権力側を代弁した言説である。本研究では、1620年代から50年代にかけて書かれた、後のチャールズ二世への称讃詩としてのイエス生誕詩を取り上げ、それらが王権を強固にするためにどれほど政治的に重要なものであったのかを明らかにする。そして、王制から共和制に至る過程でイエス生誕詩にどのような変化が見られたのかを議論する。

3. 研究の方法

本研究は国内を中心として一次資料と二次資料を収集し、その読解を行うことで実施した。二年計画のうち初年度に初期近代以前と初期近代の一次資料と批評の読解を、二年目には十七世紀の文献に絞り、一次資料と二次資料の読解を行った。また、両年度ともに、大英図書館所蔵の手稿本に当たることで、印刷本として残されていないマイナーな王党派詩人によるスチュアート朝を賛美した作品を参照した。各年度ともに、学会発表を通じて、研究の成果を公表した。その具体的な内容は以下の通りである。

(1) 平成25年度

本年度は初期近代以前のイエス生誕詩の一次資料と批評の読解を、後半は十七世紀におけるイエス生誕詩の文献収集と読解を中心に行った。

初期近代以前の一次資料は、Richard Leighton Greene, ed., *The Early English Carols*, 2nd edn (1977), Robert D. Stevick, ed., *One Hundred Middle English Lyrics*, rev. edn (1994) 等の中英語のアンソロジーを用い、中英語期におけるイエス生誕詩成立の背景を杵物語という観点から考察した。作品を見ると、イエス生誕を扱った作品が、聖母マリアがイエスに歌いかける子守唄という杵組みにおさまらないことを確認できる。例えば、Angela M. Lucas が *Anglo-Irish Poems of the Middle Ages* (1995) で論じているように、中英語のイエス生誕詩は修道会の教義を語るための手段として利用されることもあった。このような特定の集団によるイエス生誕詩の利用が、十七世紀のスチュアート朝讃美という系譜

に連なっている可能性を考察した。

本年度後半に行った、十七世紀の一次資料の調査と文献収集については、モダン・エディションとして入手可能なイエス生誕詩とともに、現在印刷本として入手できない当時の印刷本や、手稿として残されている大英図書館所蔵の「Add MS 15227」等に筆記された王党派のイエス生誕詩にあたり、スチュアート朝の王権讃美を行う手段として用いられたイエス生誕詩の例にあたった。Ben Jonson, Robert Herrick, 等の著名な作家に加え、William Cartwright, Thomas Freeman, Richard Fanshwe, Martin Lluelyn 等のマイナーな王党派の作家によるイエス生誕詩を、1620年代から30年代、内乱期以前、内乱期と年代毎にわけながら包括的に見ることで、イエス生誕詩の扱われ方と内容の変化を整理した。

一次資料として使用する初期近代の手稿本と印刷本の閲覧は、本研究課題の補助金（旅費）により、慶應義塾大学三田メディアセンターで、Early English Books Online のマイクロフィルムやデータベースを通じて行った。また、本研究課題のための補助金により必要な書籍を購入した。二次資料についても、主に本研究課題の補助金を使用して書籍を購入した。

(2) 平成26年度

前年度に収集した文献と、本年度に新たに収集、購入した資料の読解を引き続き行った。現在、書籍として参照できる文献が限られているため、マイクロフィルムやデータベースを大いに活用した。

本年度は、イエス生誕詩にはスチュアート朝を称讃する作品群とモチーフを共有していることを詳細に確認するために、王家に嫡子が誕生したことを祝うために編纂されたラテン語のアンソロジーも視野に入れた。これらの国王称讃詩集は国内外ともにほとんど取り扱われることがないものの、スチュアート朝称讃詩の多様性を分類する上で重要な資料となりうる。しかし、使用言語は英語に限定されていないため、研究計画の進展に際し時間の制約を受けたことから、限定したアンソロジーのみを参照するにとどまった。

また、本年度は John Milton に代表されるピューリタン詩人が、イエス生誕詩というテーマや王権に対してどのように関わっていたかを考察した。本研究課題名は「1620年代から1650年代を中心とした」としたが、研究の過程で1660年代の王政復古までを視座に含める必要が生じたために、チャールズ二世の即位を祝うアンソロジーについても論考の対象とした。

一次、二次資料の入手は、前年度と同様に、本研究課題の補助金を利用した図書館での閲覧と、書籍の購入を通じて行った。大英図書館での現地調査も行い、「Add MS 30982」等のチャールズ二世の誕生を賛美した作品が収められた手稿本を参照した。

4. 研究成果

本研究全体の成果は、手稿本に現れる王党派のマイナーな作品群も議論の俎上に載せることで、十七世紀のイエス生誕詩は政治性を強く帯びた文学テーマであることを議論したことにある。王党派の作家たちは、内乱期と王政復古に至るまで、内乱期以前に用いられた文学的イメージを繰り返し用いながら王の帰還を願い、王政復古を言祝いだことを指摘した。十七世紀の韻文に数多く見られるテーマにもかかわらず、本研究を通時的に行った研究は国内外でもあまり見られないため、意義深いものであったと考えられる。本研究課題の成果は以下の4点である。

(1) 平成26年3月8日に、研究代表者が所属する十七世紀英文学会東京支部で、「内乱期における王党派の詩と祝祭——Martin Lluelynを中心に」のタイトルで口頭発表を行った。ここでは内乱期の王党派詩人たちが、クリスマス等の祝祭日をどのように表象したかを議論した。

(2) (1)をもとに、「国王の像とイエス生誕詩——1630年から王政復古まで——」の論考を執筆した。本論文は、平成27年5月に刊行された論集、『十七世紀英文学を歴史的に読む』（金星堂）に掲載された。

(3) 平成25年12月7日、日本ミルトン協会のシンポジウムで行った口頭発表をもとに、「「偉大な監督者」ヤングとミルトン」を執筆した。本論文の加筆と修正に際して、本研究課題を遂行するために収集した資料を活用した。

(4) 平成27年2月28日に、研究代表者の所属学会であるオペロン会で「“Darkness at Noon”——王党派のキリスト表象とミルトン」のタイトルにより口頭発表を行った。これはピューリタンの側に立つ John Milton が、晩年の作品である『失樂園』と『闘士サムソン』の中で、王党派が国王賛美のために用いたイメージをどのように反駁していたのかを検討したものである。

本研究課題での研究を通じて、イエス生誕詩を論じる際には、十七世紀のクリスマスを含む祝祭日を主題にした歴史資料を参照する必要性を強く感じた。つまり、イエス生誕詩を扱う際には、祝祭日の娯楽を批判したピューリタンと、娯楽の守護者であった国王という図式の中でさらに議論を重ねる必要がある。上記研究成果の中でもこのことについての指摘は行ってきた。今後、この論点について、研究代表者が平成27年4月から行う「イングランドの内乱期と共和制下における民衆の祝祭と国王表象」（基盤研究(C)、課題番号15K02288）を通じて追究する。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

笹川 渉、「「偉大な監督者」ヤングとミルトン」, 北見工業大学紀要『人間科学研究』11号(2015) 27-43頁。[査読制有り]
http://www.lib.kitami-it.ac.jp/?page_id=136

〔学会発表〕(計2件)

笹川 渉、「“Darkness at Noon”——王党派のキリスト表象とミルトン」, 平成27年2月28日、オペロン会、国際文化会館(東京都港区)。

笹川 渉、「内乱期における王党派の詩と祝祭——Martin Lluelynを中心に」, 平成26年3月8日、十七世紀英文学会東京支部例会、立正大学(東京都品川区)。

〔図書〕(計1件)

笹川 渉、「国王の像とイエス生誕詩——1630年から王政復古まで——」, 『十七世紀英文学を歴史的に読む』(金星堂、2015) 111-36頁。[共著]

6. 研究組織

(1)研究代表者

笹川 渉 (Sasakawa Wataru)
北見工業大学 工学部 准教授
研究者番号: 10552317

以上